

編集の序

私がはじめて運動器エコーに出会ったのは、13年ほど前のこと。その頃の私は、育児と仕事、両方とも中途半端だと感じながらも目の前のことを行なう日々を送っていた。ある日探しものをしていて外来の倉庫に足を踏み入れた時、布がかけられた装置を見つけ、「なんだろう？」と思って布をとってみると、そこにエコーがあった。当時外来でエコー検査をしている先生など見たことがなく、どうしてここにエコーがあるのかわからなかった。しかし電源を入れると作動し、プローブを身体に当ててみると何か映っているようだ……。その時、使えるのに使われてない装置が自分と被る気がしてとても愛おしく思えた。そこから運動器エコーについて学べる場を探し勉強を始めた。使い方を教わり、はじめて肘の骨・軟骨が目の前で描出できたときはとても感動した。“そのときの感動を多くの人に伝えたい”私の原動力はそこにあるのかもしれない。

さて、整形外科診療の中で、画像検査というものはどこか別の部屋に行って撮影してくれるもの、という認識かもしれないが、エコー検査ではリアルタイムに目の前で身体の中を見ることができる。装置やプローブの改良が進み、画像は高画質化して組織の細かいところまで描出できるようになった。しかも動きも見ることができ、その情報量の多さは、近年多くの先生方が実感していることと思う。また、エコー検査は、画像検査でもあるけれど、コミュニケーションの一端を担ったり、触診の一部だったりもする。さらに診断のみならず治療の質を上げるモダリティーであり、単なる検査装置に留まらない、患者さんとの信頼関係を築くための必要不可欠なツールだと思っている。

本書は、各領域のエキスパートの先生方の熱い思いが詰まった言葉の結晶である。というのも、単なる執筆依頼から始まった書籍ではなく、エキスパート、若手医師、編者がweb座談会で集い、日常診療で感じる疑問やその答えをたくさん聞かせていただき、その中でエキスパートならではの着眼点、コツ、技など、読者に必ず役立つと考えた会話を文字にしてある。いわゆる依頼原稿による解説とはちょっと違った、本当の胸のうちを明かしていただいたエキスパートの先生方には心から感謝している。

1つでいいから人に頼られる仕事を身につけたいと願っていた私をここに導いてくれた多くの人たちに感謝し、今後もさらに発展していく医学の通過点ではあるが、新しいスタイルで完成したこの書籍をみなさまにお届けできることを非常に嬉しく思う。

2022年6月

広島大学大学院医系科学研究科 運動器超音波医学共同研究講座
中島祐子